

小型版・文庫本の呼称沿革考〔下〕

——(統)史的展開篇・結び——

本号目次

(2) 文庫の史的展開(前号より続く)

室町時代

安土桃山時代

江戸時代

(3) 呼称としての文庫

三 結び

室町時代

この時代は、多年にわたって対立し抗争してきた南朝・北朝が合一した時期より、足利幕府が滅亡するまでの時代である。

この時代における特徴の第一は、乱世の時代であり、しかもその騒乱もこれまでと大いに異なることは、下剋上と言う独特の風潮のもとにおける戦乱であった。即ち、前々代の鎌倉時代、前代の南北朝時代から実力者が滅亡する末期現象のなかに、君臣・親子・兄弟の相克の間を迎えた室町時代は、こうした深刻な争闘が拡大し、公家は武家に、將軍は管領に、守護は守護代にと、実権が下層のものに奪われ、
『下、上に剋つ』との風潮が国に全体に蔓延した時代であった。この動向は当然のことであるが一般庶民層に蔓延し、士一揆や一向一揆が各地で頻発した。

鈴木 徳三

その極まったのが応仁の大乱であり、京都を中心とし、十一年に及ぶ騒乱も決着もつかぬまま終息した。主な舞台であった京都は全く焦土と化し、戦乱に参加の諸將もそれぞれの領国に引揚げ、それまでの守護大名に代わって、実力により国人や土豪を組織して台頭した戦国大名の時代となった。

都は荒廃し、各地に割拠する諸大名が栄えたことにより、中央の学問・文芸も、他の文化と共に、地方へ拡散することとなった。こうした推移について、反町茂雄氏はその著作のなかで^①

政治的には武家の勢力が一段と伸張して、公家を完全に圧倒し去った時代ですね。但し、鎌倉時代には権力は鎌倉を中心にまとまっていたいましたが、足利時代、特に中期及びその以後には、地方に分散しました。権力の分散に応じて、富力も亦分散の傾向を示します。公家の収入は、大部分武家に押領され、その武家の富力は、各地の戦国大名及びその重臣たちの手に散らばった、というのが、この時代の現実。権力と富力と、二つながら喪失した公卿貴族は、文権の大部分を放棄し、その切り売りによって、辛うじて生計を維持して居りました。両者をほしきままに入手した地方の武家たちは、文芸を継承し、さらに発展させるだけの素養はなく、余裕も持ちません。受け入れるだけでした。必然的に文化は、はかばかしく発展せ

ず、文学は衰退しました。写本の生産も不振だったらしく、その現存は予想外に少ないのです。

と述べている。このように武家の勢力が強まるに伴い、公卿達の凋落化が著しくなったその結果、これまで学問・文芸の担い手であった貴族から武家達の手に移るが、その発展を彼らに期することは適わず衰退の一途を辿るのみであった。

しかし、この衰退からの脱出の道は、禅僧達の活躍により開かれた。鎌倉初期以来、禅宗は武家社会の尚武の気風に合致する処から快く迎え入れられ、僧侶は彼ら武士団に最も欠けていた学識・教養を補い、当代の指導的役割を担ったものである。和田万吉氏は

蓋し当時国内にて、最も学識ありしものは禅僧なりしかば、為政者の頭たる将軍が政治向きにつきて諮詢する相手はやはりこれ等の僧侶のみ。又軍陣の上に敵の動静を探り、若しくは講話談判の使者とするには、僧侶はその務當りて事に就し易かりしかば、おのづから僧侶は政に参与し、敵味方間の折衝に于係することとなれり。と禅僧の役割を高く評価している。

鎌倉時代以来、京都に限らず鎌倉の五山も栄え五山文学が発達した。その中心は当然禅僧であって、足利幕府確立の功ある実力者三代將軍義満は、將軍直屬の五山十刹の住持任免・寺領管理を掌る僧録司には春屋妙葩を任命した。更に幕府財政を支える対明勘合貿易の事務管掌に五山の僧を命ずるなど禅僧を重用したので、禅宗は愈々栄え、勢い五山文学は室町時代には最盛期となった。他の宗派と異って不立文字を教義の根本とする故に朱子学に通じ、漢詩文に長じた禅僧達が当代学芸の中心となり、室町時代第二の特徴となった。

既に述べたが、明と私的貿易に果たした僧侶の役割は大きく、これに附随して学問・文芸の発達に大いに貢献している。この間の事情について、和田万吉氏に拠れば

當時明と我が国との交通は最も僧侶界に盛なりしこと、鎌倉時代に於けるより甚しく、少しく感慨ある禅僧の如きは入明求法を尋常

事とせし有様にて、その間には詩文を以て明の学僧等と唱和せしことも少からず。而してこれ等の入明僧の日本に帰るや、多少の唐本を将来し、人を替へ歳を累ぬるままにその部数次第に加はりしもの如し。されば室町時代の末期までに、我が国に入りし元明の書籍は予想外に多数により、又一方朝鮮より韓本の入り来りし数も少からざりしならん。室町時代は戦乱の世なりしといへども、長き間には閑日月ありて、学問に従事することを得し僧侶もあり。詩書文芸方面も専ら彼僧侶の手に掌握せられし状は史の示す如く五山文学と称せられたり。

と述べた。このように禅僧が中国文学に傾斜する事由を、尾形裕康氏の著に

不立文字^{○以心伝心の意。禅宗の立場を示す標語。}の教義を奉ずる禅僧が経学や詩文に没入するのは矛盾のように思われる。しかし、理由のないことではなかった。禅が重んずる直感の心境を表現するには、詩文の形式を用いる必要があったので、中国でも、唐代から禅僧の心が文学の方へ向かって、禅林文学がおこり、代表作も現われていた。五山の文学は純然たる漢文学である。とりわけ多くは四六文体であった。これは構成が密で、一つの言葉に二つの意味が含まれている。すなわち重義の文章で、故事をもつて作るのである。そのためには、外典の群書を研究し、豊富な学識を必要とした。加うるに鎌倉時代以後、中国との間に、禅僧の往復が盛んに行なわれ、名僧が来朝した。日本からも、無象・南浦を始め多くの禅僧が入宋した。禅僧の往復に伴って、朱子学や漢詩文が入りきたり、仏教以外の清新な学芸が高度に進んだ。室町時代にはいわゆる五山文学の発達となり、夢想・龜山・春屋・義堂・絶海ら、多くの学僧や詩僧が輩出した。とある。五山の名僧知識のなかには、学僧として中国文学を専業とする者もあり、その学識を以って、將軍家・諸大名の政治・外交・学事の顧問として貢献し、天竜寺船を仕立て金閣の贅を尽くし、莊嚴寺院を建立できたのも、彼ら協力による私貿易の故であった。

一方、この間に、禅僧の多くが大陸と往来して交流を深め、明僧も来朝する者多く、五山文学の進展はもとより、諸文化の発展に寄与すること大であった、と言うことができる。

禅僧を中心に確立した五山の文学は純然たる儒学であり、禅宗の諸寺院では挙ってこれらを教育する機関であった。後年の江戸中葉、学事・軍事の顧問となる者もあり、多くの禅僧が多方面に活躍した。個々の傑出した名僧知識も多くその後も続くが、当代程多数の僧侶達が潑刺として時代に生きたのも、史上稀有のことであった。

第三の特徴は、戦乱の続いた時代ではあったが、その蔭では時の主権者足利氏が弱体の余り正式な国交ではなかったとは言え、大陸との頻繁な往来が続けられた。義満は卑屈な朝貢を結び非難されるが、勘合貿易の妙味により寺に限らず、巷間の教育施設をも寺子屋と称して多数設け、教育普及に役立っている。

一方、水準の高い教育も発達している。これらのうちで特に有名なものは、関東管領足利氏の執事上杉憲実が再興した下野国足利学校である。前出尾形裕康氏は^⑤

この学校は、室町時代末葉から戦国時代にかけては、校運が特に繁栄した。天文十八年、宣教師として来日した耶蘇会士フランシスコ・ザヴィエルが、インドのゴアへ送った書簡で、「坂東の学院^{○足利学校}あり。日本国中最も大にして最も有名なり」とか「坂東の大学には四方より攻学の徒雲集す、かくて学徒その郷国に帰るやおのが学びたる所を以て郷人に授くるなり」と報じたほどである。

と述べている。この学校の教育の中心は、儒学であるが、これに易学と兵学を加え、乱世の武士が最も必要とする知識や教養を取り入れて時代の要請に應えていた。初代庠主は鎌倉円覚寺快元で、以下代々禅僧が庠主となつて、最盛期の九代九華の時代には学生三千人と伝えられている。

足利学校のほかに、諸寺院の学問所も高水準の教育機関だった。こ

れについて前出尾形氏は再びザヴィエルの書簡を引用して^⑥

学校という名称を用いていなかったが、実質上の学校であった。

外人の目には、寺院の学問所が大学に見えた。さきに述べたフランシスコ・ザヴィエルの書簡中にも「京都には有名な一つの大学あり尚又五つの主要なる学林と二百有余の僧院とあり……京都の大学の外、日本には其他の五ヶ所に主なる学院存す^{○高木寺}コーヤ^{○根}野山^{○根}ネグ^{○根}ヒ^{○根}ソ^{○根}比^{○根}及びオーミヤ^{○根}近^{○根}この四つは京都の周囲に互に相近く位し、各三千五百の学徒を有す」といっている。

と述べて、五山を中心とする禅寺が、この時代の学問水準を維持し、後代に文化を伝える教育機関であったことを証している。

当代における最高学府と目される足利学校の蔵書はどのようなものであつたろうか。前出和田氏の叙述によると、次のようであつた。^⑦

足利学校に宋版の多きは何によるか。或は憲実が明国に求めしといふ説もあれど、当時軍政の事多端にして、特に使を彼国に遣はすの余暇無かりしこととて、求書の事跡も史に見えず。蓋しこれ等の宋本は、半は憲実が内地に散逸してありしものを、旧家等に探訪して、同校に収めしならん。明より取り寄せたりとの説は想像ならんのみ。而して同校の書は、経書、儒書の多きことも国学の後なるが故にて、金沢本の儒仏和漢の書相交りしとは趣を異にせり。「印は、筆者の附加したもの」

とあって、収書の経路を、当時まで散逸してありしものを収めたと述べ、更にはこれらの散逸した典籍も、既に衰えた国学の旧蔵が一旦逸出して、憲実により国学の旧跡に再度収められたと解することもできよう。

室町時代における学問・文芸は、公家中心から僧侶中心の時代に変貌した。禅僧が武家達の理解と援護により五山文学を確立できたのに対し、公家にとっては、上代栄えた大学寮、国学、及び諸氏族の私学だった大学別曹も次々と滅び、朝廷の学問所も度重なる武家政権との抗争でかぎりが見え隠れする有様であつた。中世の公家のなかに学問

無く、教養に欠ける『朝臣の無学』と指摘されても、あながち否定できない時代であったとも言える。事の真実はともあれ、衰微の時代であった。

連綿と続いてきた公家の家々にあっても、経済的支えであった荘園は守護大名らに奪われ、多年にわたって依存してきた宮中すら門閥の修理費にさえも事を欠く有様とあつては頼りとすることも適わず、ひたすら家門に安坐してきた公家達には生活能力とて無く、彼らの生活は困窮を極めた。このような環境のもとでは、伝統ある公家の学問も、衰微の一途を辿つたと言つても過言ではない。

例外とも言えるのは、一条兼良の活躍である。父を摂家に連なる関白とし、母を学問の名門菅原家の出とする兼良は、戦乱の世に生を享けるが、上下の尊崇を集め、多くの著作を残した。有職故実については『江次第抄』・『公事根源』・『桃花葉集』があり、古典文学の注釈では、源氏物語の注釈書『花鳥余情』を著わし、日本書紀の研究では、忌部正道や卜部（吉田）兼熙らと共に進め、彼自身『日本書紀纂疏』をものしている。

和歌は沈滞し、前期に勅撰集として『新統古今和歌集』を撰したのを最後に途絶し、京都歌壇は低調で、僅か為秀・為尹らの冷泉派の動きが目立つ。注目に価することは、足利氏の支族にして半生の長きを戦塵の間に身を置いた今川了俊が為秀門下であつた。地方の武将で和歌を嗜む者の増加を物語っている。この武将と、その師為尹の弟子に正徹が出て、家集に『草根和歌集』、歌論『正徹物語』があり、在京の武人細川・小笠原等の歌の指導に当たつた。

和歌に比べ、遊戯的・社交的な連歌は、この時代になつて最盛期を迎えた。平安時代の短連歌、鎌倉時代の長連歌と続くが、和歌と違って昔の定めもなく、ただ当座の逸興を催せばよしとする連歌は、当意即妙、遊戯性、娯楽性を備えているので、当代における下剋上の風潮に適合しやすく、応仁の乱以後も大いに流行した。

多勢の連歌師が現われるが、正徹から学んだ心敬の『竹林抄』、兼載

の協力で『新撰菟玖波集』、弟子の肖柏・宗長と共に『水無瀬三吟百韻』・『湯山三吟』などを撰んだ宗祇らが、連歌文学の完成者として有名であつた。

宗祇の後、伊勢神宮の神官荒木田守武・山崎宗鑑らによって正風連歌から滑稽・諷刺などを内容とする俳諧連歌が派生し、近世の俳諧成立の母胎となつた。

低調な公家の学問とは言え、前代に引き続いて有職故実の研究や古典文学の注釈的研究にみるべきものがあつた。有職研究では一条兼良が『江次第抄』・『公事根源』、更に源氏物語の注釈書として『花鳥余情』三十巻、ついで『日本書紀纂疏』を著した。前代までの物語文学は、時代の世相が反映し、従来の公家のほか、僧侶、隠遁者、教養ある武人、末には市井人と思しき庶民の手になる物語草子が作られた。広い読者層を予想して前代までのいろいろな素材を得て、内様も多種多様な御伽草子が多数作られ、江戸初期に及んでいる。『秋夜長物語』・『曾我物語』・『義経記』・『酒天童子』・『一寸法師』・『文正草子』・『楊貴妃物語』など、物語文学から外れて筋本位、興味本位の読物であり、連歌と並んで当代の特色をなすものであつた。これらは書写されたもので、版本が刊行されるのは江戸期中葉で、それ以降になつて出版が盛んとなっている。

末期で注目に価するものに、奈良絵本がある。この頃発達した御伽草子を中心に幸若・物語・謡曲を内容とする絵入古写本で、江戸まで続いている。呼称の由来は明らかでないが、『その描写彩色の手法に奈良彫の彩色人形の様式と相通うもの』を思わしめる所から言い出されたものかもしれない。その奈良彫の木彫彩色人形は春日神社の田楽等の風流人形に用いるものからの発達である⁹⁾。と言う。今日からみれば、これらの奈良絵本は、室町末期を飾るに応しい美本の出現であつた。

室町時代は、既に述べたように時代の影響を真向から受けて、学問・文芸は低調であつたが、一部では継承されるが国書の刊行は殆んど

なかった。この時代における写本の状況について長澤規矩也氏は^⑩

室町時代になると写本はいっそう多く、当時は国書がまだほとんど出版されなかったので、漢籍に比して国書は貴重視されるが、国書の中でも、伝本が比較的多い日本書紀とか、伊勢物語とか、源氏物語とか、多くの勅撰集などは、特別なものの以外そう重んぜられず古事記とか、平家物語とかは非常に少ない。仏書、ことに寺僧のノートなどは伝来が非常に多く、ほとんど問題にされないほど軽視されている。

とあり、この時代における書物への関心が、どのような傾向であったかを知ることができる。なお、当代の厳しい時代的環境のなかで、学識ある公卿達がどのように乱世に処したが、その一面について前出反町氏が生々しく述べている^⑪

公家界の学芸の代表者三条西実隆は、自分の筆写した源氏物語五十四帖を二度売って居ります。一度は甲斐の国の武士に、もう一度は九州肥後の国の武士に。後者の名は鹿子木三河守親貞、価格は二千疋と、判って居ります。また、実隆の筆写本で、いま重要文化財に指定されている「新撰菟玖波集」は、この人が明応九年に、葦田木工助源友興という武士に頼まれて書き与えたもので、もちろん十分な礼物を受けていたに相違ありません。越後の高梨刑部大輔という武士にも古今集を書き与えて、五百疋の礼金を受けて居ります。この人は文名が高く、書も巧みだったので、地方の大名、又は有力な被官人から依頼を受ける事が屢々だった。藤原定家には及びませんが、定家に次いで、古写本史上特筆すべき一人でした。仲介者は、地方まわりの旅を多くした宗祇、その弟子の玄清、宗長等の連歌の宗匠たち。ほぼ同時代で、相並んで歌詠に勝れ、書名も高く、また蹴鞠の宗家として天下に名を知られた飛鳥井雅康も、多くを書写して武家に与えて、代物を受けた人。…中略…これら中級の公卿・殿上人だけでなく、最高の貴族も、同じ営みをして居ります。

とあるが、この時代における学問・文芸に携る公卿達の姿が生き生きと叙述され、反町氏を措いてこのような視点からの洞察ができる向きは見当たらない。極めて傾聴すべき指摘ではあるまいか。

写本の分野は以上のような状況であったが、将来仏典の多いなかでかつて盛行だった写経について触れてみよう。仏教界で盛んなのは禅宗であるが、元来禅宗は、不立文字の教義を奉じ、仏書は重んじられなかった。それ故、後で触れるが版経の開版に押され、写経供養は概して一般化していなかったようである。この様相について川瀬一馬氏の著を引用してみたい。^⑫

室町時代に於ける写経は、見るべきものに乏しい。前代以来元明彼此の禅宗の往来等につれて、禅籍の将来はもとより、一切経（元版・明版）も屢々もたらされた上、我が国に於いても、各地に於ける版経の開版が愈々盛んとなった為、写経供養等を行うのは特別な場合となった事が主因であろう。一切経（宋元版又は古写）の補欠を補筆したり、大般若経の補巻を補配したりする為の書写はかなり行われてもいるが、大般若の如きはそれさえも版経を新刷して補う事が少なかった。

と述べ、概して衰微期だったと言えよう。

室町時代の版本は、戦乱の時代であったので全体的に衰微期であったことは否めない。しかしながら、前期は、前代に続いて衰微し始め僅かな仏書の刊行にとどまり、出版地も奈良の諸寺院が衰え、京都が唯一の中心で禅宗が栄えると共に仏書に加わって儒書の刊行が増加した。それも明国から将来の漢籍の覆刻が多くなり、実用的な字書が徐々に出版されるようになった。

応仁の乱を境にして都から地方出版が増加した。地方における有力な禅宗諸寺院ではもとより、都から離散して地方の戦国大名に迎えられた公家や僧侶達、私貿易で経済的に豊かになった諸大名、貿易によって栄えた都市などで地方出版が行なわれた。とりわけ、都に近くが堺、その他では、山口・薩摩等の出版が有名である。

室町時代は、騒乱の時代であり、学問・文芸の衰えた時代であったと言われるが、五山文学の盛行、あるいは高等教育機関として優れた足利学校の存在によって、厳しい環境下ではあったが、一面には相当の水準が維持されてきた事実を認めなくてはならない。鎌倉時代から普及し始めた、「千字文」・「往来物」も、当代末期から江戸時代まで頻る発達したと言われ、江戸時代には数千種に及ぶ程だった。

しかし、国書の類の刊行となると発達することはなかった。長澤規矩也氏は

漢籍がこれだけ多数出版〔筆者注、五山版の盛行を指す〕されたのに対して、和書の出版は非常に少なかった。ことに、和書中で最も中心となるべき、物語や歌集が一種も刊行されなかったということは、当時の版本の需要者が全く仏教や漢学、それに伴って、漢詩漢文に関する知識を求めていたということによるものである。物語や歌学の書の需要は非常に少なく、写本のみで十分間に合ったと見える。

と、国書が出版されない事情を指摘されたが、このように解釈することによって、当代における写本・版本の状況について理解することができよう。

室町時代は政治的に不安定な戦乱の時代であり、都の学問・文芸が衰微し、写本・版本が衰えたものではあるが、これらのいずれもが地方に拡散し、水準こそ低いようだが全国各地ではそれなりの発達を遂げている。

いかなる時代、どのような地域であっても学問・文芸の存する処には書籍があり、諸寺院には多少に拘らず經典が備え付けられる。これらの典籍が蓄積されると蔵書となり、量的に増加することによって、その呼称のいかんを問わず文庫が成立する。

歴代朝廷はもとより、公卿諸名家にいたるまで多くの文庫が存在し、これまで盛衰を重ねてきたことは、前号まで述べてきた。

当代にも前代から引続き、伏見殿の御文庫を始め、多くの文庫があり、少くとも典籍閲覧や写本下命等、数々の営みがなされたことは、後崇光院の『看聞御記』に屢々記載されている。処が、前代から継承した御文庫・諸文庫もこの時代に及んで、大きな記事としても

応永廿三年（一四二六）御所焼亡

応仁元年（一四六七）応仁の乱

がある程度で、都は全く灰燼と帰している。朝廷御文庫に関しては、大乱後の

文明八年（一四七六）室町殿炎上の際、宮中累代の文書悉く焼失とあってとどめをさしている。

この時代を通して、僅かに生き延びられたのは、弥家の官務文庫が存したに過ぎない。

これより以前、鎌倉時代の嘉禄二年（一二三六）官文殿焼失以来、代々大史職を勤めた小槻家の私庫を、その代用として官文殿に準ずる扱いとし、官務文庫としての役割を果たさせた。

応仁の乱に際しては、東軍の首領細川勝元、並びに相対する西軍の首領山名宗全共に、この官務文庫に制札を樹て、その不可侵を令している。この文庫が、戦乱を切り抜けたのも当然で、蛇足ながら江戸期に入っても徳川將軍の庇護も受け、明治に入って修史局、そして現今では図書寮に引き継がれ今日に及ぶ。

公卿の文庫では、当代随一の学才一条兼良の桃華坊文庫、歴代天皇の侍読として聞えた大外記大橋業忠の文書類、その他著名な仏閣、公卿、武家の邸宅も、応仁の乱で焼失したが、これらのなかに多くの文庫もあって、貴重な文書・典籍類が失なわれた。

室町時代も鎌倉時代と同様武家を中心の時代であった。両者の異なる点は、根拠地が違以上に根本的差違は、前者が特定の武將、あるいは少数の武將が活躍した時代であり、後者は実権の争奪を巡って、大多數の武將が入れ替わり立ち替わり活躍した騒乱の時代であった。この間に、前代までと違い、武將として珍しく好学の武將が現われ始

みならず、そのあたりのしらなみこぞりて、七百合ばかりのし

あるいは、擇録令、関所、備所、検地などの新機軸による都市政

的安定を図った。

折柄の戦乱のさ中に、九州に上陸したキリスト教は畿内に及ぶが、仏教に対抗意識を抱き、南蛮文化に関心を持つ信長は保護を加え、全国制覇を目指した政治力・経済力・軍事力に支えられて、安土を中心

に全く新しい文化を誕生させている。

こうして天下統一を眼前にした信長ではあったが、腹臣の部将明智光秀の謀叛に遭遇、本能寺の火焔と共に非業の最後を遂げた。

突然起こった大混乱に、戸惑う信長輩下の諸部将を尻目に、一部将に過ぎなかった羽柴秀吉は、急報に接するや否や、忽ち、旧主から命じられた中国遠征を、急速かつ巧妙に事態を收拾し、取って返して叛将光秀を敗死させることによって、並みいる諸先輩を押しつけて信長の後継者たる地位を手中に収めた。

その後の秀吉は益々巧みな政治力と戦略を駆使して、旧主の遺子よりもより、信長旧来の同盟者徳川家康、実力ある多くの遺臣を倒し、あるいは懐柔して旧主に代って天下の統一を成し遂げた。名実共に天下人としての名を恣にした秀吉は、関白、太政大臣となって遂に位、人臣を極めると共に一時代を画するに至っている。

統一政策としては、信長の政策を踏襲するが、更に太閤検地、刀狩、金座・銀座の貨幣政策を推進し、宣教師追放、朱印船貿易と対外政策にも力を傾け、経済的安定に成果を挙げ、豊家安泰を策した。

権力と富を集中した新興の権力者は、根拠を伏見城に置き、南蛮文化を包含した奢侈の傾向を帯び、中世以来の伝統芸能・芸術を大成したとも言える桃山文化を築いている。

国内における政治的・経済的安定を得た秀吉は、海外への勢力伸展を企図し、明国遠征の初段階として、天下の武將に号令して不幸な朝鮮侵略に乗り出した。再度の遠征の末、遺子秀頼に後顧の憂いを残しながら高齢故没し、天下の情勢に陰りをみせながら野望は挫折する。

さきに信長が天下統一に踏みだした頃より彼にとって有力な同盟者として貢献した徳川家康は、信長の憤死後、暫くは秀吉の政略に歩を

譲ってきたが、実力は毫も衰えず、むしろ着実に実力を蓄えてきた。秀吉歿後、その遺言を重んじ、豊家への遠慮を保ってきたが遺子秀頼の周辺の石田三成らは苛立って対抗したので関ヶ原に大敗させ、間もなく征夷大將軍に任ぜられ、江戸に幕府を開いた。

家康は、諸制度の整備、産業の振興、文教政策の推進などに力を尽くし、幕府体制の確立に努め、遂には大坂夏・冬の陣により、大坂城に拠った豊臣氏を滅亡させ、すべての反対勢力を抹消し、天下統一を完うする。

安土桃山時代とは、前半は織田信長が畿内を中心に全国制覇に接近した時代であり、後半は、信長の遺鉢を受けついで秀吉が天下統一を完成させ、遂にその子秀頼が実力者家康に滅されるまでの時代で、両者を合して安土桃山時代と呼んだのであった。

安土桃山時代の梗概について既に述べてきたが、前代末の戦国時代の混乱から天下統一への過程を経て近世封建制確立の時代であった。この間における特徴は、ポルトガル人をはじめとするヨーロッパ人の渡来や、日本人の海外進出もあって、キリスト教・ヨーロッパ風俗が伝わり、一過性ながら南蛮文化として桃山文化に混入した。

次の特徴をなす事件は秀吉の抱いた明国遠征策により再度にわたる朝鮮半島侵略であった。他国を苦難に陥れ、謂われなき戦役でいたずらに彼我を犠牲にし、しかも永年の禍根を残した戦いも秀吉の死により終息した。この間に外征した武將達が、彼の地から木綿栽培技術を移入し、あるいは、当時頗る発達していた陶器業を導入し、わが国における産業の振興に貢献したのみならず、文化面でも朝鮮活版印刷術が将来されたことを契機として、わが国独自の古活字版盛行の時代を迎えている。

次の特徴として、秀吉亡き後、実権を掌中に収めた徳川家康は、対外的には朝鮮・明国との国交修復、ヨーロッパ諸国との交渉創始、英人航海士ウィリヤム・アダムス（日本名三浦按針）を外交顧問として雇うなど積極的な面も示している。国内的には、幕府草創期のことも

あつて乱世の名残りの風潮や、対立諸侯を統制する必要から、相も変らず武断主義的傾向であつたが、家康自身は学僧との交わりを大切に、文献・典籍の愛護、文書の安全保管のための文庫経営、古典の普及と利用化のための刊行事業などに努めた。好学の武将であると共に数少ない読書家であり、真の愛書家として多くの業績や逸話を残し、歴代將軍、並びに一門の多くは家康の遺志を継承している。

この時代における学問・文芸は、中世から近世へと大きく転換する狭間に位置し、見るべきものが乏しかった。目立つのは、武人にして歌人でもあり、故実に通じ、三条西実隆より古今伝授を受けた細川幽斎、並びに前代から連歌師として、宗祇以来の名匠と謳われた里村紹巴、正親町天皇の侍医として知られ、多くの権力者からも信頼された医学の曲直瀬道三などが有名であつた。

写本の世界も、この頃から版本に圧倒されて、愈々終焉の時代を迎える。前出反町氏はこれらの写本に関して次のように述べる。

古写本の時代は終りに近づきました。桃山時代と江戸初期の写本界の本流は、軍記物に在る、と見てよいでしょう。一時あれほど流行した連歌書は、下火となりました。つれて古今、伊勢の類も、陳腐の感を免れません。新しい支配階級は、新しい文芸を求めます。権力と金力を完全に掌握した武家の中心は、豊臣秀吉の手で一先ず確立し、強大な中央権力は、ほどそのまゝの姿で、徳川家康に継承され、更に数段の堅牢さを加えたのでした。武士たちの生活に、安定と余裕を増しました。自己の生活に近く、生き方の参考にもなる読み物を需めるのは自然でしょう。その第一が平家物語、第二が太平記。……中略……また此の間には、古今・伊勢、それに歌書類も相当写れて居りますが、いわば強弩の末で、採るべきものは極く少ない。謡曲・御伽草子の古写本には、まだ問題とすべきものがあります。連歌から派生した山崎宗鑑の犬筑波集等の俳諧や狂歌集には、若干見るに足るものもあります。漢籍の写本類は不振でした。

とある。室町時代の終り近くの文正・大永・天文の頃から製作された奈良絵本も引続き当代でも作られ、次の江戸初期に引き継がれていた。

わが国における書物発達史において、大きな進展、あるいは変革がなされた節目をいくつか挙げる事ができる。これらの中でも限られた短い期間に、いくつかの進展が連続的に起こつたのは当代であり、前述のように従来の写本から版本盛行の時代への移行する質的にも大きな変革があつたのは、この時代を措いて他に見出だすことは困難である。

既に触れたが、尾張の小城主信長が乱世に躍り出て対抗者を斥け、天下統一を目前にした頃、異教の布教を容認し、その学林設立を認め、次は秀吉は禁教とし、ついで家康は禁圧したので、これら諸学校は廃滅するに至つた。その中途の天正十八年（一五九〇）外交使節として来日したヴァリニアノは、島原半島南端の加津佐で「金属活字のローマ字による文語体日本語」という奇妙な『サントス（聖使徒）のご作業のうち抜き書』一五九一年版を刊行した。これがわが国におけるきりしたん版創始である。加津佐に運ばれ、印刷の用に供されたこの印刷機について富永牧太氏は、その著の中で

この印刷機は、その後、島原半島の加津佐から、天草、長崎と所在を移しつつ、二十余年間国内にあつて多くの書籍を製産して伝道をしたすけ、出版史も稀有の現象として注目せられてゐる。その製品の現存するもの三十余種、七十余本、大方は世界に散在するが、印行のつたえられて実物の存せぬものを入れると、その数ははるかに増すと思われる。

と述べている。別の箇所でも氏は、^⑨「各国に現存する三十一種七十三本をもつて本書の対象とした」と続けている。この種のきりしたん版について、長澤規矩也氏は、

室町末期（筆者注、本稿では安土桃山時代に相当）に活字印刷術が、キリスト教に伴つて西欧からと、秀吉の朝鮮征伐によつて朝鮮からと両方面からわが国に

伝来した。前者は、ローマ字から片仮名交じり、平仮名まじりへと、語学書・伝道書から文学書へと、木活から鋳造活字へと進展したが、切支丹宗の禁止政策につれて、慶長十三年（一六一二）を最後に断絶した。

と述べ、きりした。版の結末を語っている。

さきに永年の禍根となる朝鮮征伐に触れ、彼国の発達した活版印刷術が伝来したことを述べた。前記きりした。版開版より僅か遅れた文禄二年（一五九二）後陽成天皇勅版『古文孝経』が刊行されたが、実物は今日まで伝わらない。しかし、側近の西洞院時慶の日記『時慶卿記』にはその刊行経過が記されていて、御学問好きの天皇の命を承けて、伝来の銅活字により時慶らが印刷したとある。これが文禄勅版で、わが国における活字版による刊行の創始であり、この時より江戸時代初期まで古活字版盛行の時代となった。この頃の事情をも含めて、前出長澤氏は、次のように続けている。この時代における活字印刷術は、

シナ・朝鮮の東洋における旧式活字印刷の輸入で、文禄二年（一五九二）後陽成天皇の古文孝経を最古とするが、まだ伝本が存在を知らない。伝存最古のものは同四年（一五九五）刊行の法華支義序が最古であるが、比較的多い伝本は恐らく覆刻本であろう。

慶長年間（一五九六―一六一四）は古活字版の最盛期であった。それは新奇であったこと、為政者の理解があったことなどによるものであったが、数部ないし百部内外という印刷能力が当時の全国的需要にはば匹敵し、経済的であったことが関係し、当時出版事業に熱心であった寺僧や医者がこれを知って採用したことによる。

とある。古活字版最盛の事由について、同氏の指摘の外、次のように言えよう。室町時代頃から刷りの立派な宋版が多数移入し、整版印刷の極美を見せられ、従来のように器用な僧侶や経師屋の仕事では宋版の域に到達困難であることを周辺で自覚認識し始めた。更に加えて五山版盛行の蔭に禅僧が招いた元人彫工等の専門技術職の集団があり、

これまでの速成彫工の技術では不満足となった。こうした時期に、大量の活字が移入され、連れてきた朝鮮技術者の作業内容も、必ずしも彫工のように特殊な高度の技術を要せず、容易に習熟できるものとして当時の関係者が受け入れたのではなからうか。

この頃の主な古活字版を幸田成友氏の著によって摘記してみると、後陽成天皇の勅版として、前記幻の勅版の後に、木活字版ながら『錦繡段』（慶長二年七月）・『勸学文』（慶長二年八月）・『日本書紀神代卷』（慶長四年二月）等八点が挙げられ、徳川家康は、京洛及び伏見地方に於て、慶長四年から十一年（一六〇六）まで八年間、三要素（足利学校九世座主、『孔子家語』以下七部）及び西笑承兌（相国寺内豊光寺開山第一世、『貞観政要』以下二部）を監督として合計十部廿八冊〔注、一部一冊不詳を含む〕を木活字により印行した。その外、家康の特許や引退後重ねて刊行を命ずるなど、好學、古典愛護の家康の姿を髣髴させている。

家康以外に、武家としては、豊臣秀頼が『帝鑑図説』（慶長十一年）、上杉家老臣の直江山城守兼統の『文選』（慶長十二年）があった。寺院関係では、個人として日性（円智）・慈眼・正運らがおりましたが、寺院では京都附近の諸寺、地方では三河、下総の寺院が挙げられた。

民間では、医師の小瀬甫庵（蒙求）文禄五年・一五九六、以下七点）・曲直瀬道三・同玄朔・五十川了庵・如庵宗室らの名があり、医師ではないが医書まで出版した医徳堂守三・梅寿軒とがあった。

民間人による刊行で特筆に値するのは、本阿弥光悦とその協力者角倉素庵らの光悦本・角倉本・嵯峨本と呼ばれる一群の出版があった。

光悦は、代々刀剣の鑑定・研磨を業とする本阿弥家に生まれ業を継ぐ一方、絵画・詩絵・陶芸に独創的な才能を発揮し、茶の湯・作庭にもすぐれ、書を能くし光悦流を興した芸術家であった。当代高貴の人士との交際が広く、晩年家康から洛北の地を与えられ、一族や工匠を率いて工芸品の制作に従い、多くの名品を今日に伝えている。角倉素庵の父了以は秀吉から朱印状を許された海外貿易家であり、京都・伏見

の諸河川を開削した事業家であったが、その子素庵も父の業を助け、独力で海外貿易、船舶運輸を営み、大坂冬・夏の陣には徳川氏のために勤め、大いに繁栄した。素庵は学問を好み、藤原惺窩に学び、詩歌にすぐれ、特に書は光悦に学んで後世角倉流、または与一流として自ら一流を創めた人物であった。

前記光悦が、具引き雲母刷りの料紙に、自ら版下を筆写して木版印刷を行ない、美術工芸的な意匠で装った光悦本がある。料紙の大きさ・紙質・摺りに工夫を凝らし、字形・書体に佳美を選び、印刷にも細心の注意を傾けて刷った天下無比に値する美しい書物で、角倉素庵も協力したと言われる天下の絶品である。

安土桃山時代は、半世紀にも届かない短い時代であるが、書物の歴史としては革新的な出来事が比較的多く集中した重要な時代である。だが、一般史から言えば、室町時代の乱世から僅少の英雄達の出現により、全国制覇を目前とする最後の乱戦模様を経て、最終戦まで耐えた徳川家康の政治安定の末期近い十余年まで待たねばならなかった。

○ 慶長七年（一六〇二）江戸城内にはじめて御文庫を創建せられ、金沢文庫に伝えし古書どもをあまたして収貯せられ、（慶長

見聞録）

○ 慶長七年六月、江戸御城ノ南富士見ノ亭ニ、御文庫ヲ建テラ

レ、廿四日金沢文庫ノ本、其ノ他ノ図書ヲ收儲セラル、是レ江戸御文庫ノ始ナリ（近藤正典、好書）

○ 七年六月、江戸御城之南富士見之亭に、金沢文庫を御移被成、御文庫を御建立也（慶長）

○ （慶長十二年暮十二月）二十二日丑刻駿城火あり、殿閣一宇ものこらず此災にかかる……御文庫宝蔵は恙なかりしかども、御

座に置かれし御宝物ども、一として烏有たらざるはなし（台院殿）

○ 一昨十九日、（慶長十九年六月）高野山宝生院之儀、文庫以下宝亀院封掛置候儀、立御耳、為門中如寺法相披、諸道具以下令点検、無紛失様にと被仰出候（日光閣日記（第十二））

○ 七月廿九日、日野唯心被_レ献侍中群要十卷金沢文庫。先年関白秀次令_レ取之興_二日野殿一本也（慶長十九年の条）

○ 「付註」御サウシ蔵ハ冊子蔵ナリ、按ニ慶長七年六月、江戸御城ノ南富士見ノ亭ニ金沢文庫ヲ御移ナサレ、御文庫ヲ御建立也（近藤守重「古文」）

○ 応仁よりこのかた百余年騒乱打ちつゞき、天下の書籍ことごとく散送せしを御歎きありて、遍く古書を購求せしめらる。この時諸家より献りしもの亦少からず、菊亭右府晴季公よりは、金沢文庫に蔵せし律令を献ぜらる。こは武州金沢に在しを、関白秀次取テ蔵せられ、後菊亭に贈られしを今献ぜしなり。（東照宮御実録）

文庫の呼称については、既に指摘したことであるが、前代の室町時代以降その使用は定着したものと考えられる。それらの理由については、結論の処で後述するが、安土桃山時代における文庫の呼称に関する記事は、時代の年数が短いこともあって極めて少ない。これらの用例から推して安土桃山期も、室町期の延長として文庫と称するのが一般的であると考える。

江戸時代

戦国時代から続いた騒乱も、豊家滅亡の大坂夏の陣をもって一段落することとなった。以降、名実共に徳川氏の天下となるや早速武家諸法度を始め、禁中並公家諸法度・諸宗本山諸法度を打ち出し、中央集権的封建制を組み入れた幕藩体制を固めることにより、天下の泰平を図った。その結果、源頼朝以来の武家政権の延長として、比較的平穏な時代が一世紀半に及び、十五代將軍慶喜による版籍奉還までを徳川時代とも呼んでいる。

書物の歴史に関連する当代の特色は、時代の推移と共に広範な文治政策が拡散されたことである。好学の家康とは言え、幕藩制度の安定確立までは、室町時代以来の戦国乱世の余勢もあり、対立諸侯への統制には武威が必要だった。強力な中央集権的な幕藩体制を築くまで若

千の波瀾があったが、それも三代將軍家光の頃までで四代將軍家綱の代から文治主義が政治の表面に出るようになったと言う。

文治主義の現れとは、封建的幕藩体制確立のため、儒教思想、特に朱子学を幕府の官学とし、文教政策の普及徹底を図ったことに始まる。この朱子学について尾形裕康氏は、

朱子学の性格は、社会の階級や身分秩序が厳然として存することを自認している。ゆえに朱子学は江戸時代封建制の新社会秩序を鞏固にして、維持せしめたるため好個の精神的支柱であった。

と述べ、家康の好学、多くの歴代將軍・諸大名らが、学事振興に立派な業績を挙げ得たことも、要するに治国平天下の有効な手段であり、所詮は、自らの体制維持の方便として見るべきであろう。にもかくにも、諸学派が競合して学問文芸が盛んとなり、幕府直轄学校・藩校・私塾等が多数設けられ、更に典籍の収集、官版・藩版・私版の刊行が頻りとなった。この政策により、大多数の庶民まで教育の恩恵を蒙ることができ、その普及振りは史上嘗て見られない程であった。

第二の特徴は、この時代の半ば頃から庶民的勢力が急激に伸展したことである。封建制の下では階級制度・主従関係が確立され、將軍・大名・武士達は為政者として臨み、これに対し庶民らは隷属的であった。従って前者が威圧的であり、後者は卑屈な態度で臨んでいる。しかし、室町時代以来勃興しつつあった庶民は商業経済の発展、あるいは貨幣経済の進展により財力を蓄え、これに対して権威のみに縛られた武士階級は、平和な時代には非生産的な一定の石高による消費階級に過ぎず、時代が推移して生活水準が向上しても、定額固定の収入による武士の生活では追従不能とならざるを得ない。挙句には町人からの借財に頼る外なく、勢い、両者の関係が変化し始め、庶民勢力がいよいよ強まった。

学問・文芸の発達には実に恵まれた条件の備わった時代であった。各時代共に朝廷周辺の御学問は夙に著名であり、『禁中并公家諸法度』では「天子御能学問第一」と殊更にお勧めしている。江戸幕府初代將

軍家康は殊に好学として有名であり、その功績には数々の著しいものがある。就中、文献・古典に対する政策として小野則秋氏は^⑧

一 古典の愛護政策

二 古典の安全保管のための文庫経営

三 古典の普及利用化のための刊行事業

家康の遺志を継ぐ將軍家、徳川一門中の好学で聞えた大名は譜代・外様の別なく、大小名を問わず好学の大名が現われて御前講義・殿中講筵が屢々行なわれ、幕府・諸藩・巷間には多種多様の教育機関多数が設けられるようになった。

これまで学問の指導は五山の学僧によって支えられてきたが、江戸時代になると公家・僧侶に限らず、大名・武士のなかにも学者と比肩してなら遜色ない人物も出、牢人・町人などからも輩出した。

江戸時代初期に朱子学発展の端を開き、その祖となったのは藤原惺窩であった。彼は下冷泉家の一子として生まれ、初め京都五山の名利相国寺の門に入り、「仏学を修めたが儒学に帰して還俗し」た。^⑨経書を究めて朱子学の大衆となり、「公家・僧侶の学問以外に学者の学問を開き」、その学徳は当時の有力大名から導信を得、加えて「その門には林羅山を筆頭に那波活所・松永尺五・堀杏庵等^{この四人を惺窩門の四天王と言ふ}の巨儒を出して」わが国儒学の学者としてその基をなしたのは藤原惺窩であった。

前記「惺窩によって起った朱子学を幕府の官学として、その地位を確立したものは林羅山である」^⑩が、さきに、その師惺窩は家康に江戸に招かれ、『貞観政要』を講じ、御前講釈の始めとなった。その後、羅山は家康に仕えて御書庫を管掌し、官本の歴看に当たり、家光時代には侍講として仕えた。江戸上野忍が岡に別業を賜わり念願の家塾を設けることができ、後は幕府の援助もあって半官半私の私塾となるが、援助の増大と共に幕府直轄の昌平坂学問所（昌平黉）として当代随一の高等教育機関となった。幕府としては、昌平黉の外、深川・

麹町・麻布に直轄の教授所設け、民間学者の願いを容れ、援助・便宜を与えて開設し昌平黉が管理していた。⁹⁹

好学の諸大名はもとより、諸藩では幕府の方針もあって藩校が設けられた。当時の大名は三百諸侯と言われた程なので、藩校の数も多く、なかには二校以上設けた藩もあり、頗る多くの藩校が存在した。

藩校では、藩の子弟教育を目的としたので士庶の別が厳しく、庶民の子弟には門戸を閉す藩が多かった。そこで藩や藩の有力者、あるいは代官・庶民の有志が幕府や藩の許可を得て郷学が設けられた。郷学は郷村にある学校で、士庶の別なく多くの子弟を対象とする別個の学校であった。

庶民の初等教育として目覚ましい発達を遂げた機関には寺子屋があった。寺院における世俗子弟の教育は、平安時代に溯ると言うが寺子屋の名称は江戸時代に始まるが、その実在は既に中世からである。

江戸時代の教育機関として、幕府の直轄学校・藩校・郷学・寺子屋等が全国にゆきわたるよう存在した。その外に、約千五百の私塾が全国に散在したと言う。この私塾は質的に水準が高い機関で、尾形裕康氏は¹⁰⁰

江戸時代には、學術が振興して、諸学派が現われ、多くの学者が輩出した。これらの学者の大部分は、門戸を構えて、士庶を問わず集まってくる好学の青年に、専門の高等教育を施した。この学者の私宅の学問所を私塾と称している。入学者は他の強制によるものではなく、塾主の人格や学問を慕って集まった。ゆえに比較的年齢も長じ、師弟間の情宜もきわめて厚かった。

と述べ、これらの私塾の中には、規模の大小、寺子屋と識別困難なものもあり、正確な設置数は無理だが、「日本教育資料」には、全国の私塾約千五百が挙げたと結んでいる。

長々と述べてきたが、このように教育機関数の多いことは、江戸時代における識字層の飛躍的増加を意味し、当代の学問水準の向上にいても同様な認識が許されよう。

文芸について言えば、既に述べてきたよう江戸時代は泰平の世が続ぎ、次第に庶民が社会的・経済的勢力を得ると共に、庶民のための読物が要求される庶民の生活を舞台とし、彼らの夢や憧れの理想を描く文芸が要求されるようになった。この時代の文学は町人文学と代弁されるのであるが、当代の社会的環境の影響によるもので、これまでの公家・僧侶、あるいは武士階級と頗る異った文芸が盛んとなった時代であった。

前代からの和歌のほか、庶民的な俳諧・狂歌・仮名草子・浄瑠璃・歌舞伎などが行われ、庶民的な文芸が漸次広い読者層に拡散されつつあった。こうした初期の様相も元禄頃には発展し、蕉門の俳諧、貞柳一派の狂歌、仮名草子が庶民の小説となって西鶴に代表される浮世草子、近松の浄瑠璃、名優団十郎・藤十郎らが活躍する歌舞伎などのように、詩歌・小説・演劇の各方面にわたって絢爛たる時代となる。これらの多くは、京・大阪を中心とする上方文学と総称されるが、次の元文から天明頃までは、江戸が政治的・社会的に整備されると共に人心は関東に移り始め、江戸文学が展開する。上方に比べ、泰平に倦んだ武士や儒者など知識階級の人が多かった。彼らの知的遊びとして、諷刺・滑稽・穿ち・通とする文芸として、川柳・狂歌、小説では洒落本、黄表紙、滑稽本が流行した外、国学者達の和歌をはじめ、俳諧や読本などが盛んとなった。それらも文化文政頃には爛熟頽廃期を迎え、歌舞伎の生世話物の完成に見られるように洗練された江戸趣味が醸成されたが、寛政の改革、度々の風俗取り締まりで、作者達も氣力を失い、狂歌・川柳も低調、洒落本・黄表紙も衰え、低俗な滑稽本・人情本・合巻が行われた。低俗的な書物と言えば、その反面、大衆受けするので大量の作品が作られた。庶民教育の普及により識字層の量的拡大、並びは庶民の思想や生活に溶けこんだ江戸文学の盛行は、従来、上層階級の教養・趣味とされていた和歌も、日頃の生活に根ざす歌人良寛などの活躍により一般の人びとの間に広く詠まれるようになり、国学を学ぶ庶民が増加したのも江戸末期の著しい傾向である。

今まで特定の階層に寡占された学問・文芸が、こうして江戸時代より広く一般に拡散されることとなった。

安土桃山時代末期、古活字版の刊行が盛んになるに伴い、わが国の印刷技術は急激に向上した。反町氏の指摘によれば、

日本の書物史は、慶長初年に新時代を迎えます。印刷本時代の始まり。開幕者は、京都の医師兼史家の小瀬甫庵……以下中略（筆者注、江戸時代以前の記述部）……十五年前後には、謡曲百番・源氏物語五十四冊の二つの大物が、書体も外装も美しい活字版で発行されます。印刷はここで技術的に確立しました。書物世界の革命。その進行は時代の要求、留むべくありません。写本製作は、徐々に静かに終息に向かいます。寛永以後の写本は、多くのお嫁入り本のたぐいで、学術的価値のあるものは、極めて少なくなります。

と述べ、『古写本と写本との限界点を、どこに置くかは一つの問題です。慶長・元和の間とするは、先ず妥当な見解でしょう。』と続けておられ、江戸時代における写本の位置付けに関する同氏の所見を、豊かな経験と識見により示されている。

わが国における印刷文化史を概観すると、奈良時代は草創期として別にして、平安・鎌倉時代は、すべて仏書の刊行で殆ど奈良・京都、及びその近辺で刊行されている。南北朝・室町時代も多くは仏書で、末期に僅少の辞書類等が出版され、刊行地は奈良・京都以外の地方出版が増加した。出版に携っていたのは多くが僧侶で、公家貴族は写本に関わっている者が多いが、出版関係者となると極めて少ない。これまでの出版界、ひいては読書界、ひいては読書界を押えていたのは仏教関係者であったと言っても過言ではあるまい。

江戸時代になると、僧侶も加わるが好学家にして印刷家とも言える家康を始め、諸大名・重臣・医師・素封家まで印刷に手を出し、前述のように古活字版の盛行の後、本格的な印刷本時代となった。加えて各藩の藩費では幕府の命により漢籍を重印、あるいは後印し、テキストとした。

また前述のように町人文学として庶民に歓迎される作品が多数作られた。では江戸時代にどれほどの部数の書物が出版されたであろうか。これについて森銑三氏は、

安永から文化へかけて、黄表紙と称する一種の戯作が、毎年五六十種づつ江戸で出版せられてゐる。取敢へずそれを基礎として、極めて大まかな推算ではあるが、江戸に於ける一箇年間の出版図書を一千部と仮定するそして京版その他の出版図書を二千部と仮定するならば、全国で年に三千部の図書が出版せられたことになり、その状態が二百年間続いてゐるものとすると六十万部といふ相当に夥しい数量の図書が江戸時代に出版せられたことになる。これはあまりに簡略な考へ方であるが、かうした計算を以てしても、江戸時代の刊本の総計が数十万部の多きに上つてゐる事実だけは確かめられよう。

とある。しかし、江戸時代における出版書目の全数を明らかにすることはもとより、現存数を網羅することも困難である。まして個々の書目の出版部数となると大半は不詳である。加えて重版、重刷等の問題も不確定な要素が多い。だが事実の究明には、たとえ仮定を設けた、推計の手順などに万人の理解が得られなくても、未知の課題へ迫ろうとする同氏の着想は評価しなくてはならない。

森氏の指摘のように、『江戸時代の刊本の総計が数十万部の多きに上つてゐる』ことは、同氏に優る推計が示されない限り認めざるを得ないであろう。

仮に数十万部の書物が出版されたとするならば、当時この数値に見合う程の多勢の読書人口がいた筈であり、しかも前代の室町・安土桃山時代などと比べ、当代の教育、特に庶民教育がどれほど発達し充実したかを物語る好個の証拠とも言えるし、江戸時代における出版活動の繁栄振りを知ることができる。

本稿では、各時代について叙述した末尾に文庫の呼称の用例を、その時代における文献資料に求め、その一節を列挙してきた。

処が、各時代の文庫の呼称は、既に室町時代半ば辺りから使用が定着し始め、安土桃山を経て江戸時代に及ぶと、その用例は大いに普及し、むしろ一般化している。

加えて江戸時代の基礎は徳川家康によって築かれ、徳川幕府として発展した。しかも家康は、文獻、古典に対する政策には積極的であった。そのため江戸移封の十二年後の慶長七年（一六〇二）には城内に紅葉山文庫を建て、隠居後は駿府城に駿河文庫を設け、この間、自らの文庫のみならず、朝廷・公家の諸文庫、金沢文庫・足利学校の文庫等の施設の改修、蔵書の充実に協力・援助を惜しまぬ姿勢は終生変ることがなかった。

その他、家康の好學に始まる幕府の文教政策、及び江戸期における学問・文芸、並びに教育事情について既に述べたが、このような時代的背景の下では、多くの書物が収集され、多数の蔵書家も現われ、もろもろの教育機関にも書架が準備され、これらの蓄積が文庫として運営されたものである。従って江戸時代ではこの種の典籍収蔵の場は夥しい数に上っている。

今日に伝えられている収蔵の場の呼称は、諸社寺の多くが使用してきた宝蔵、経蔵等の類の外に次のように列挙できる。

文庫の種類を便宜次のよう区分した。

朝廷。公家。將軍家・及び一門。諸大名。神社。寺院。諸士一般。

一、朝廷

東山御文庫。小槻家官務文庫。桂宮文庫〔智仁親王・享和五年改築〕その他伏見宮・有栖川宮・閑院宮等の各宮家に文庫が設けられた。

二、公家

陽明文庫。冷泉家文庫。三条西家文庫。柳原家文庫。

三、將軍家、及び一門

紅葉山文庫〔慶長七年（一六〇二）〕

桜田文庫〔六代將軍家宣 宝永六年（一七〇九）以前〕
尾張藩文庫〔藩祖義直〕
彰考館文庫〔水戸徳川光圀〕
偕樂園文庫〔紀伊徳川治宝〕
潜龍閣文庫〔水戸徳川斉昭〕

四、諸大名

八雲軒文庫〔飯田藩主脇坂安治、元和三年（一六一七）〕
尊経閣文庫〔藩祖利家の室芳春院松子〕
福田文庫〔肥後熊本藩主細川家、藩祖幽斎が遺した書物〕
披雲閣文庫〔讃岐高松藩松平家〕
楽蔵堂文庫〔肥前平戸藩主松浦静山、平戸に設ける〕
感恩斎文庫〔同前松浦静山、江戸藩邸〕
黄雪園文庫〔近江西大路藩主市橋長昭、文化五年（一八〇八）別称黄雪書屋〕
佐伯文庫〔豊後佐伯藩主毛利高標〕
楽亭文庫〔白河藩主松平定信、文政六年（一八二三）〕
水月楼文庫〔堅田藩主堀田正敦〕
新宮城文庫〔紀伊新宮藩主水野忠央、天保六年（一八三五）〕
花廬舍文庫〔須坂藩主堀直格、弘化二年（一八四五）〕
春叢文庫〔薩摩藩主島津斎彬、嘉永五年（一八五二）充実〕
阿波国文庫〔徳島藩主蜂須賀重喜・同斉昌〕

五、神社

熱田文庫〔熱田神宮〕
豊宮崎文庫〔伊勢外宮弥宜度会延佳、慶安五年（一六四八）〕
出雲大社文庫〔雲州公松平通政改修、寛文二年（一六六二）〕
賀茂三手文庫〔上賀茂神社、延宝八年（一六八〇）〕
林崎文庫〔伊勢内宮宇治会合所大年寄等、貞享三年（一六八六）〕
北野文庫〔北野天満宮・書林仲間、元禄十五年（一七〇二）〕
鹿島文庫〔鹿島神宮・清水宗茂、宝永二年（一七〇五）〕

住吉文庫〔住吉神社・全国書物問屋、享保八年（一七三三）〕
太宰府文庫〔太宰府天満宮司検校坊快鎮、享和頃（一八〇一—三）〕

羽田八幡宮文庫〔三河羽田八幡宮・羽田野敬雄、嘉永元年（一八四八）〕

六、寺院

瑞聖寺文庫〔芝白金瑞聖寺境内・了翁禪師、延宝二年（一六七四）〕

勸学寮文庫〔東叡山境内・了翁、貞享元年（一六八四）〕
高台院文庫〔高野山・了翁、貞享二年（一六八五）頃〕

七、諸士一般

古義堂文庫〔京堀河塾・伊藤東涯、元禄十一年（一六九八）〕
吉見文庫〔尾張東照宮祠官吉見幸和、享保九年（一七二四）〕
兼葭堂文庫〔木村兼葭堂〕

愛岳麗文庫〔旗本大久保忠寄、寛政五年（一七九三）修覆〕
擁書楼文庫〔国学者小山田与清、文化十二年（一八二五）〕

荏野文庫〔国学者田中大秀、文化十年（一八一七）〕
青柳館文庫〔青柳文蔵、文政十二年（一八二九）〕

賜蘆文庫〔大阪町奉行新見正路、天保三年（一八三三）〕
洗心洞文庫〔大阪与力大塩平八郎、天保八年（一八三七）売却〕

射和文庫〔同替商竹川竹斎、慶応二年（一八六六）〕
不忍文庫〔幕臣屋代弘賢〕

恩頼堂文庫〔宸翰鑑定師猪熊信男〕
温故堂文庫〔国学者塙保己一〕

青裳文庫〔国学者狩谷棊斎〕

以上、周辺の文献に散見した文庫の呼称を附した文庫名を摘記してみた。遺漏もあろうが文庫の呼称の大方を知ることができる。

しかし、すべて文庫と称している訳ではなく、奥州塩籠神社の名山蔵書庫（村井古叡、天明年間）、経宜堂（岡山河本一阿、宝暦頃）、文会

書庫（尾張国学者河村秀頼、安永二年（一七七三））、万余巻楼（幕府儒古賀約里・侗庵父子）、擁書蔵（書物奉行近藤守重）、白藤書屋（書物奉行鈴木成恭）などの呼称もあるが、全般的には文庫であり、この名称は確実に定着したものと思う。

これらの外、江戸時代中頃以降から幕末にかけて多くの個人蔵書家が輩出したが、文庫の呼称を用いている例として、

曲直瀬雲夢の神門文庫 新井白石の天爵文庫
大田南畝の杏花園文庫 北川真顔の狂歌堂文庫

山崎美成の好問堂文庫 大久保忠尚の磐田文庫
石塚豊芥子の石塚文庫 安田竹荘の香島文庫

更に有名な蔵書家だが、その文庫の呼称について未だ筆者として確認できない諸士の文庫本に、角倉素庵、吉田篁墩、松下見林、岸本由豆流、小寺玉晃等の名が去来する。

昌平坂学問所、その他の幕府直轄学校、あるいは諸藩の藩塾にはそれぞれ文庫があったであろうが、果たして個々の名称が附せられていたであろうか。総合的に判断するには未だ調査が不十分であり、今後の課題としたい。

(3) 呼称としての文庫

漢字文化圏の源である中国における文庫について言えば、熟語としての使用は専門外なので不案内だが、若干の中国語辞典でみた処見出すことはできなかった。図書館史の立場からの確認では、わが国のように文庫との呼称は与えなかったようである。この点、書籍を蓄積し、閲覧する場所、即ち図書館も歴史的には使用されず、わが国で用された図書館〔明治前半ば、わが国で創始〕の語が、中国へ逆輸出され、今日彼国で使用されていることと同じであろう。

わが国では奈良時代の文殿ふどのの呼称が、平安時代を経て若干の変更を交えて変遷する。鎌倉時代になると文庫の呼称が発達し始め、南北朝・室町時代には定着し、江戸時代中頃には最盛期を迎えた。

これらの発達の過程をみると、わが国における漢文学の発展と大き

別表 書名に「文庫」付加の書籍一覧——刊行年・内容種別

刊行年代	合 計	仏 書	往 来 物	芸 能	文 学								不 詳
					和 歌	狂 歌	俳 諧	人 情 本	合 巻	絵 本	艶 本	狂 文	
1596 慶長	1	1											
1615 元和 寛正 慶安													
1652 承明 万治 文宝 延享 貞享 元禄	1						1						
1704 宝永 正徳 享保 元禄 寛延 享延	1 1 1 1		1 1	1									1
1751 宝暦 明和 安永 天明 寛政	5 8 3 4 7		4 5 3 2 3	1 1		2 1				1	1 1	1	1
1801 享和 文化 文政 天保 弘化 嘉永 安政 万延 文久	1 4 6 8 3 4 6 1 1	1	1 3 4 1 2 1	1 1		3 2 1	1 1	1 1 1 1		1	1 1		1 1
元治													
1867 慶応	3		2										1
刊年不詳	25		6		2	1	2			1	3		10
合 計	95	2	39	3	4	3	11	2	5	3	7	1	15

な関連があるようである。特に文庫の呼称が発達し始めた時期、及びそれらが定着した室町時代とは、五山文学の発達期、及び最盛期として符合する。即ち、中国から諸文物移入の当初期には、文庫の呼称も訓読みの系統が多かった。武士階層と僧侶達との連繋により、五山文学が発展し始めると文庫の呼称も音読みが発達し、盛んになると共にそれに倣って音読みが定着している。従って両者の間には深い関わりが見受けられ、漢文学の普及に伴って音読み熟語の一般化する動向を窺うことができる。

江戸時代には、朱子学が官学となつたのでこの傾向はますます著しく、遂には施設としての文庫の呼称が広く普及する。

一方、既に述べたように時代が進むに伴って書籍の需要も高まり、出版書籍も激増するなかで、本来は施設の呼称であつた文庫を書名の

末尾に加えるようになった。

かねてから、筆者はこの種の書目を摘記していたが漸く九十五点を挙げる事ができた。これらの中で、最も古い刊記の書目は、親鸞上人縁りの仏書で、

大沢文庫 一冊 袋中良定著 慶長十六年刊

がある。国書総目録によれば別書名として「浄土三經相伝抄」となっている。

この版は整版印刷の筈であるが、刊年の慶長十六年と言えば未だ古活字版盛行期に属し、木版の印刷が一時的に衰えた時期である。

次に、前記の書名末尾に文庫を附した書目九十五点について、刊行の時、並び期に書物の主題内容別一覧として別表に纏めた。

この表から江戸時代における書名に文庫を附した書籍の出版状況に

ついで、その概要を知ることができる。

三、結び

今日慣用されている文庫本に附す文庫の呼称は、長い歴史を経て現在に至った。その間における変遷を示すと、次のようである。



この推移を簡条書きして説明しよう。

- (1) フドノ・文庫は、上代諸文献に見える。
〔源氏物語・賢木・宇津保物語・延喜式等〕
- (2) 文庫の読みは、フミドノに通ずる。
- (3) フミドノは、書庫となる。
- (4) 書庫の殿は、倉とも通じ、文庫となる。
- (5) 文庫の読みは、フミクラである。
- (6) フミクラは、文庫に充てることもできる。
- (7) 文庫は、ブンコと音読できる。

このような段階を経て「文庫」となったと筆者は考える。この所見の補充説明として

- (3) 項の書庫・フミドノに就いては、

文庫としての文庫をいふ場合は別に書庫と書くこともあり、鹿持雅澄は『万葉集古義』（巻五之下）に「書庫・酒日倭歌四首」の詞書を解説して

書庫はフミトノと訓べし、後世の書院の事なり、〔以下略〕

と小野則秋氏は述べているが、これにより(3)項の書庫・フミトノを理解することができよう。

次に、(6)項文庫の読みフミクラについては次の二点の書目で説明し

たい。

幕末の国学者波田野敬雄編の著書として次の歌集がある。

文庫乃佐迦延 二巻二冊 安政二年跋 この歌集の書名の読みは、フグラノサカエとあり、文庫と記したフミグラの一例である。

次の例は、明治へ入ってから図書ではあるが、江戸の〇〇〇文庫の呼称を継承した例であり、偶々筆者収集による原資料により確認できたので紹介する。書名と言うより冠称に属するが、

活用文庫 宝の吹き与勢 明治二十二年刊東京自我書房梓

とあって、この活用文庫の読みについては、序文の内、関係部分を引用してみよう。

唯に序文めかしく筆とるにもあたらず弥ど……巻中略目は万民日用欠くべからざる帝国規則の人の尤易したき人相に其他二三の要類を集め以て一小冊とし名をも活用文庫宝の吹よ勢と称ふ印刷の鮮明なる表題にもとらざる証は一部を買って其偽なき効をなめ玉へ

明治廿二年十月

版主識

とあって、文庫にふみくらとルビをうっており、今日流にブンコと読まない旨を明白にしている。詳細は、別稿「日本における文庫本の歴史(2)」を御覧願えれば幸いである。

これらの二例によ、称呼としての文庫は、わが国における書物の歴史、並びに文庫発達との狭間に位置しながら時代の進展と共に推移し、近代に至ったものである。

現在訪れている文庫本ブームは、これまで起こった過去のブームと全く違い、その規模と言ひ、継続する期間と言ひ、稀にみる文庫本ブームである。こうした折に、これらの文庫本のルーツの一面をなす呼称の変遷を辿ることによって、更に文庫本に対する理解が深まることを期して詮索を重ねてきた次第である。

〔完〕

(参考) 前号目次

小型版・文庫本の呼称沿革考——(叢書の刊行編)まえがき

一 叢書の刊行

- 1 中国における叢書類の刊刻
- (1) 叢書刊行の創始
- (2) 明時代における叢書の刊行
- (3) 清時代における叢書の刊行
- 2 わが国における叢書類の刊行
- (1) 叢書の伝来
- (2) 叢書類の刊行とその用例

(以上、大妻女子大学文学部紀要第十八号掲載)

二、呼称「文庫」の系譜

- 1 中国における文庫の呼称
- 2 わが国における文庫の呼称
- (1) 文庫の源流
- (2) 文庫の史的展開

平安時代

鎌倉時代

南北朝時代

(以上、大妻女子大学文学部紀要第十九号掲載)

参考文献

- 浅倉亀三編『日本古刻書史』明治四十二年
木宮泰彦著『日本印刷文化史』昭和七年
小林善八著『日本出版文化史』昭和十三年
麻生磯次等編『日本文学史の指導と実践』昭和三十六年

引用文献

- ①反町茂雄 日本の古典籍 その面白さ その尊さ 昭和五十九年 二六頁
- ②和田万吉 日本文献史序説 日本書誌学大系—32 昭和五十八年 一六四頁
- ③②と同じ 一六七—一八頁
- ④尾形裕康 日本教育通史 昭和三十五年 一二二—一三頁
- ⑤④と同じ 一一一頁
- ⑥④と同じ 一一四—一五頁
- ⑦②と同じ 一四六頁
- ⑧平泉澄 中世に於ける精神生活 大正十五年 八一頁
- ⑨川瀬一馬 日本書誌学用語辞典 昭和五十七年 二二—四頁

- ⑩長澤規矩也 書誌学序説 昭和三十五年 一二六頁
- ⑪①と同じ 三〇—二頁
- ⑫川瀬一馬 日本書誌学概説 昭和四十七年 一九五頁
- ⑬④と同じ 八三頁
- ⑭長澤規矩也 古書のはなし—書誌学入門 昭和五十一年 一一九—二〇頁
- ⑮小野則秋 日本文庫史の研究 下巻 昭和五十四年 一六頁
- ⑯①と同じ 三三—一六頁
- ⑰鈴木敏夫 プレ・グーテンベルグ時代 昭和五十一年 四五九頁
- ⑱富永牧太 ヤリシタン版文字攷 昭和五十三年 三頁
- ⑲⑧と同じ 八頁
- ⑳長澤規矩也 図書学略説 昭和五十四年 九九頁
- ㉑木宮泰彦 日本印刷文化史 昭和七年・同五十年復刻 三八八頁
- ㉒②と同じ 九九頁
- ㉓幸田成友 書誌学の話 日本書誌学大系—7 昭和五十四年 一一—二〇頁
- ㉔②と同じ 二〇—二二頁
- ㉕②と同じ 二二—三四頁
- ㉖④と同じ 一三三頁
- ㉗横山達三 日本近世教育史 昭和四十八年復刻 二二頁
- ㉘⑤と同じ 一六頁
- ㉙栗田元次 解説日本文化史 昭和二十三年 三三四頁
- ㉚②と同じ 三三四—三五頁
- ㉛④と同じ 一四八頁
- ㉜①と同じ 三六—七頁
- ㉝森銃三 書物と江戸文化 昭和十六年 二頁
- ㉞小野則秋 日本文庫史の研究 上巻 昭和十九年 八九頁
- ㉟鈴木徳三 日本における文庫本の歴史 (2) 日本古書通信 第52巻第8号通 二—三頁